

Redhair Rosy 「8abyrousa」

Redhair Rosy 「8abyrousa」 リリース記念インタビュー

バビルサ (Babrousa) は、牙が額に向かって伸びる珍獣。自身の頭蓋骨を突き刺しかねないことから、“死を見つめる動物”と呼ばれている。Redhair Rosy のニューシングル「8abyrousa」は、そんなバビルサをモチーフにした楽曲。今回のインタビューでは、Ryosei Yamada (Vo) と Taito Katahira (G) に同曲を解説してもらった。

取材・文 / 安部孝晴

—Redhair Rosy が始動してから、2025 年 10 月 9 日で丸 1 年が経ちました。

Ryosei ちょっと早過ぎましたね。

Taito 早過ぎたなあ。

Ryosei ライブのセットリストを更新し続けて、レコーディングに常に追われて。ほんまに半端じゃないスピード感やったなと思います。

—「8abyrousa」も、そんな激動の日々の中で作られたんですね。

Ryosei この曲はたぶん、ラブソングなんです。ラブソングにしようと思って歌詞を書いたわけじゃないけど、ライブの MC で曲紹介をするとき「ラブソングです」って自然と言っていました。

—意図せず口から出たんですか。

Ryosei はい。恋愛の意味だけじゃなくて、家族とか、友人とか、よく会う近所の猫とか。「8abyrousa」は、そういうところまで含めたラブソングですね。

Taito ラブ&ピースソングよな。

Ryosei そうやな (笑)。

—「8abyrousa」の制作過程について、詳しく聞かせてください。

Ryosei この曲でまず意識したのは、ピークをしっかりと作ること。今までなら 1 回で終わらせてたかもしれんサビを、2 回繰り返すようにしてます。大きなうねりが生まれるように、スタジオムミみたいな広い場所をイメージして、ドラムのフレーズや鍵盤のアンサンブル、声のディレイを組み上げていきました。ギターに関しては重たい音ときらびやかな音、両方欲しかったので、開放弦がたくさん鳴るようなコード進行にしています。

Taito ギターをがつつり出すアレンジは、今まであんまりやってなかったから新鮮でした。

Ryosei 「Heart-Shaped Devil II」の場合は、Keisho のギターと Taito のギターが絡み合っただけで1つのフレーズになるんですけど、「8abyrousa」の場合は、Keisho と Taito が基本的に同じフレーズを弾いています。スリーピースバンドでも成り立つようなギターを意識しました。

—Taito さんはギターだけでなく、鍵盤も弾いている？

Taito はい。最近はピアノを弾きたい気持ちが強くて。今後はもっとやっていこうと思ってます。イントロのフレーズはデモの段階からすでにあって、最初に聴いたときは LCD Soundsystem の「All My Friends」みたいやなと思ったけど、実際に弾いてみると、やっぱり俺のリズム感になる。弾く人の手癖が出る。それが結果的にはよかったですね。

—ミックス作業はいかがでしたか？

Taito 今回に関しては、イメージ通りの音像になったなと思います。そういう意味で、自分の進化を感じましたね。みんなであだこうだ言いながら、全部の楽器をうまく出すことにフォーカスして。今年は常にレコーディングをしてたので、そういう時間が多くてすごくよかったです。

Ryosei 数年後、自分らで聴いたときに「やっぱいいもん作ったな」「あのときにしか作れへんかったな」と思えるようにがんばってます。レコーディングは己との戦いみたいな感じですね。

—「8abyrousa」がリリースされたのは12月24日。クリスマスに言及した歌詞もありますね。

Ryosei 「もうクリスマスは来ないでしょ」は、“サンタさんはもう来ない”という意味で、直前のリック「2つに引き裂いた駄菓子の味がした気がした」と同じニュアンスなんです。昔のことを思い出すキーワードとして「クリスマス」と「駄菓子」を入れてます。

—「2つに引き裂いた」というのは？

Ryosei 駄菓子って、分け合って食べてた記憶があって。例えば「蒲焼さん太郎」とか、ちぎって友達や弟にあげてた気がするんですよね。

—次のセクションで歌われる「蛇の影」と「月は下弦」。この押韻もすごく印象的でした。

Ryosei 「蛇の影」は杯中蛇影に由来していて、“存在しないものを恐れる”という意味。「月は下弦」は歌詞を書いているときに見上げた月が下弦だったというだけなんですけど、実はこの2つ、虚構と現実の対比になっていて。ないものの影と、あるものの光で、韻を踏んでます。

—終盤の「ただ会えるだけでいいのにね」はシンプルで、それ故に力強い表現ですね。

Ryosei なんかもうほんまに、会えるだけでいい。その気持ちを直接的に書きました。前半のリックではいろいろ問題提起してるけど、「お前ら間違ってるぞ」ではなく「俺もそうなんや」と伝えたいんです。クリスマスプレゼントはもう届かなくて、欲しいもののリストが溜まっていく。こうなりたいとか、こうなってほしいとか、山ほどあるじゃないですか。特に現代は、みんな消費者としてジャンキーの度を超えてる。そういう状況に対して「みんなもそうやけど、俺も一緒や」と思っていて。「ほんまに大事なものはなんや」と考えたとき、大切な人に会えるだけでいいやろと。そういう答えが出たんです。

Taito 俺もほんまにそやなと思う。今、俺らが日本でできてることって、戦争になったら全部できなくなるじゃないですか。戦争が始まったら結局、ただ会いたいという気持ちだけになる。「8abyrousa」のリリックからは、現代に対する訴えかけをすごく感じます。共感する部分が多い。

—タイトルを「8abyrousa」にした理由は？

Ryosei バビルサのこと、つい最近知って。調べてみたら“死を見つめる動物”って出てきたんですよ。「いや、そんなん俺らもちやう？」「人間だって、よっぽど生きても100歳そこそこやろ？」と思いました。そのあと、友達に話したんです。「“死を見つめる動物”がいるらしい」って。単純なようで複雑にも感じられる会話が、すごく滑稽で、楽しかった。そんな話をしてるうちに日が沈んで、「バビルサの瞳が何を見ているの？なんて話簡単な問題が解けないようだね 嘆こうや日が暮れるまで」という歌詞を書いて。これが一発目のリリックになったので、曲名が「8abyrousa」になりました。

—バビルサについて語り合う描写は、楽しい時間の象徴なんですね。

Ryosei はい。答えのない話が好きなんやと思います。その場のみんなで出す答えは、1年後、2年後、10年後には変わってるかもしれない。そう思いながら話すのが面白い。若い頃に結婚せえへんと言ってた人が結婚したり、長生きせえへんと言ってた人がお母さんになったり。大きな意味で“生きる”ということにつながってくる気がします。

—2026年は「8abyrousa」をどのように届けていきたいですか？

Ryosei 3月27日に1stワンマンライブ「turn red」を開催するので、まずはそこに集中していきます。そのあとは、まだ俺らのライブを観たことがない人にも、しっかり足を運んでもらえるようにしたいなと思っていて。イヤフォンで聴いてもらうだけじゃなくて、いろんな場所で観てもらえるように、会いに行きます。

Taito とにかく表に出ていく。広げていく。Redhair Rosyの旗を持って、走り回るイメージですね。